

死後

芥川龍之介

青空文庫

……僕は床へはいつても、何か本を読まないと、寝つかれない習慣を持つている。のみならずいくら本を読んでも、寝つかれないことさえ稀まれではない。こう言う僕の枕もとにはいつも読書用の電燈だのアダリン錠じょうびんの罌びんだのが並んでいる。その晩も僕はふだんのように本を二三冊蚊帳かやの中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時なんじ？」

これはとうに一寝入りひとねいりした、隣の床にいる妻の声だった。妻は赤児に腕うで枕まくらをさせ、ま横にこちらを眺めていた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思っていた。」僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合わなかった。

「うるさい。うるさい、黙って寝ろ。」

妻は僕の口真似くちまねをしながら、小声にくすくす笑っていた。が、しばらくたつたと思うと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう静かに寝入っていた。

僕はそちらを向いたまま、せつきよういんねんじよすいししょう説教因縁除睡鈔てんじくと言う本を

読んでいた。これは和漢天竺てんじくの話を享保頃の坊さんの集めた八卷ものの随筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話も滅多めったにない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部の話を読んでいるうちにそろそろ睡気ねむけを感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、じき

に眠りに落ちてしまった。――

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しよに歩いていた。砂利を敷いた歩道の幅はやっと一間か九尺しかなかった。それへまたどの家も同じようにカアキイ色の日除けを張り出していた。

「君が死ぬとは思わなかった。」

Sは扇を使いながら、こう僕に話しかけた。一いちおう応は気の毒に

思っている、その気もちを露骨に表わすことは嫌っているらしい話しぶりだった。

「君は長生きをしそうだったがね。」

「そうかしら？」

「僕等はみんなそう言っていたよ。ええと、僕よりも五つ下だね

、「とSは指を折って見て、「三十四か？ 三十四ぐらいで死んだんじゃ、」——それきり急に黙ってしまった。

僕は格別死んだことを残念に思っ**て**はいなかった。しかし何かSの手前へも羞はずかしいようには感じていた。

「仕事もやりかけていたんだろう？」

Sはもう一度遠慮勝ちに言った。

「うん、長いものを少し書きかけていた。」

「細君は？」

「達者だ。子供もこの頃は病気をしない。」

「そりやまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、

……」

僕はちよつとSの顔を眺めた。SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでゐる、——それをはつきり感じたのだつた。するとSもその瞬間に僕の気もちを感じたと見え、厭^{いや}な顔をして黙つてしまった。

しばらく口を利^きかずに歩いた後、Sは扇に日を除^よけたまま、大きい缶^{かん}づめ屋の前に立ち止つた。

「じや僕は失敬する。」

缶づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあつた。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂の支店だつた」と思った。

「君は今お父さんと一しよにゐるの？」

「ああ、この間から。」

「じゃまた。」

僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲^{まが}った。横町の角の飾^{かざり}り窓にはオルガンが一台据^すえてあつた。オルガンは内部の見えるように側面の板だけはずしてあり、そのまた内部には青竹の筒が何本も豎^{たて}に並んでいた。僕はこれを見た時にも、「なるほど、竹筒でも好いはずだ」と思った。それから——いつか僕の家^{たたく}の門の前に佇^{たたず}んでいた。

古いくぐり門や黒^{くろ}塀^{べい}は少しもふだんに変^{かわ}らなかつた。いや、門の上の葉桜の枝さえきのう見た時の通りだつた。が、新らしい^{ひょうさつ}標^{ひょう}札^{さつ}には「櫛^{くし}部^べ寓^{ぐう}」と書いてあつた。僕はこの標札を眺め

た時、ほんとうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはいることは勿論、玄関から奥へはいることも全然不徳義とは感じなかった。

妻は茶の間の縁えんがわ側に坐り、竹の皮の鎧よろいを拵こしらえていた。妻のいまわりはそのため乾皮ひぞった竹の皮だらけだった。しかし膝の上にのせた鎧はまだ草摺くさずりが一枚と胴としか出来上っていないかった。

「子供は？」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのう伯母おばさんやおばあさんとみんな鵜沼くげぬまへやりました。」

「おじいさんは？」

「おじいさんは銀行へいらしたんでしよう。」

「じや誰もいないのかい？」

「ええ、あたしと静やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透とおしていた。しかし僕はその声にたちまち妻の謔うそを感じ、少し声を荒らげて言った。

「だって櫛部寓ひようさつつて標ひょう札さつが出ているじゃないか？」

妻は驚いたように僕の顔を見上げた。その目はいつも叱しかられる時にする、途方とほうに暮れた表情をしていた。

「出ているだろう？」

「ええ。」

「じゃその人はいるんだね？」

「ええ。」

妻はすっかり悄気しよげてしまい、竹の皮の鎧よろいばかりいじっていた。

「そりやいてもかまわないさ。俺はもう死んでいるんだし、――」
僕は半ば僕自身を説得するように言いつづけた。

「お前だつてまだ若いんだしするから、そんなことはとやかく言いはしない。ただその人さえちゃんとしていれば、……」

妻はもう一度僕の顔を見上げた。僕はその顔を眺めた時、とり返しのつかぬことの出来たのを感じた。同時にまた僕自身の顔色も見る見る血の気を失ったのを感じた。

「ちゃんとした人じゃないんだね？」

「あたしは悪い人とは思いませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部某に尊敬くしべを持っていないことははつきり僕にわかつていた。ではなぜそう言うものと結婚したか？ それは

まだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑しいところに反つて気安さを見出している、——僕はそこに肚の底から不快に思わずにはいられぬものを感じた。

「子供に父と言わせられる人か？」

「そんなことを言つたつて、……」

「駄目だ、いくら弁解しても。」

妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂に顔を隠し、ぶるぶる肩を震わせていた。

「何と言う莫迦だ！ それじゃ死んだつて死に切れるものか。」

僕はじつとしてはいられない気になり、あとも見ずに書斎へはいつて行つた。すると書斎の鴨居の上に鳶口が一挺かかつ

ていた。鳶口は柄えを黒と朱との漆うるしに巻き立ててあるものだった。誰かこれを持っていたことがある、——僕はそんなことを思い出しながら、いつか書斎でも何でも無い、枳から殻たち垣がきに沿った道を歩いていた。

道はもう暮れかかっていた。のみならず道に敷いた石炭殻きも霧りさめ雨ぬか露とおかに濡れ透とっていた。僕はまだ余憤よふんを感じたまま、出来るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枳から殻たち垣がきはやはり僕の行手ゆくてに長ながとつづいているばかりだった。

僕はおのずから目を覚ました。妻や赤子は不相あいか変わ静らかに寝入せみっているらしかった。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしみりした蟬せみの声がどこか遠い木に澄み渡っていた。僕はその

声を聞きながら、あした（実はきょう）頭の疲れるのを惧れ、もう一度早く眠ろうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思い出した。夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤めて^{つと}いる。Sは実際でもあかかも知れない。僕も、――僕は妻に対しては恐しい利己主義者^{りこしゆぎ}になっている。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考えれば、一層恐しい利己主義者^{かならず}になっている。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。僕は一つには睡眠を得るために、また一つには病的に良心の昂進^{こうしん}するのを避けるために○・五瓦^{グラム}のアダリン錠を嚥^のみ、昏々とした眠りに沈んでしまった。……

（大正十四年九月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死後

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>